

江戸城お目見え儀礼における琉球国使者の朝貢使や家臣としてのアイデンティティパフォーマンス

Travis Seifman サイフマン・トラビス (立命館大学衣笠総合研究機構 特別招聘研究員(准教授))

E-mail seifman@fc.ritsumei.ac.jp

近世琉球王国は1644年から1850年までの間に、使節を17回江戸へ派遣した。当時の琉球は、徳川幕府と外交関係を維持した異国であると同時に鹿児島藩に属した家臣でもあった。この二重の存在を説明するためには、政治・経済の面から考えるよりも、儀礼に注目する必要があるであろう。

江戸城では、様々な行事の際に大名や幕臣などがグループごとに公方の御前に平伏して拝謁することがあり、これをお目見え儀礼という。¹⁾ 参加者は、着用する礼服や席の位置などで、公方との関係や公方を頂点とする秩序の中の地位を再確認・具体化した。要するに、お目見えという儀礼行為を通して、徳川公方を中心とした秩序を維持していたのである。

琉球王府が派遣した使者が御目見得儀礼に参加することは稀であったが、大名や幕臣と同様に参加することで、琉球国の政治的な地位と文化的な性質、または島津家や徳川家に対する関係や地位を再確認・実行した。その御目見得儀礼はこうした機能があったため、琉球使者と幕府との間の儀礼的な相互作用(付き合い)を分析することで、果たした関係や地位の性質が判明するのである。

17-19世紀の17回の琉球使節について

鹿児島藩支配者であった島津家は1609年に侵攻して琉球国を島津家の支配下に取り込んだが、王国の独立性についてはある程度存続して、明朝との進貢・冊封関係を継続させた。紙屋敦之はこの島津家支配下の琉球を「幕藩体制の中の異国」と称している。¹⁾

こうした島津家との関係のなか、琉球は1644年から1850年まで17回にわたって使節を江戸へ派遣した。行列などを通して琉球の文化的性質や異国としての存在を示すと同時に、島津家支配下であることや徳川幕府に対する尊敬や忠誠心を表したのである。

江戸への使節では毎回、数週間の江戸滞在期間中に使者(王子)は公方との御目見え儀礼に二・三回参加した。一人、もしくは二人で公方の御前で叩頭でお礼をし、琉球の国王からの献上物と使者自身からの進上物を進呈した。そして、引き換

えに、幕府から国王と使節の随員への拝領物を賜ったのである。

江戸城での御目見得について詳細に分析を行うと、儀礼によって再確認した琉球の徳川家に対する政治的な位置づけが理解できる。大名や朝鮮通信使など様々な階級やカテゴリーの人間が同じ大広間でお目見えに参加したため、琉球使者の装束、席順、御礼の方法、献上物、拝領物、あるいは御目見得に参加していた日本人の装束、席順、ふるまい、などとの比較も意味深いことと言えよう。

江戸・北京中心の外交儀礼思想・儀礼形式

明・清朝の外交思想や政策の指針となる基本理念は華夷秩序思想であった。明・清皇帝を文化文明や政治的な権威の中心として、周りの国々から進貢を受けるのと引き換えに、冊封(君主としての正当性)を与える世界観・制度であった。日本も例外ではなく、近世東アジアの国々はどこもこの思想を多少なりとも持っていた。

徳川幕府もある程度この華夷秩序思想を持ち、進貢儀礼の論理や文化を真似て、皇帝の代わりに将軍を中心とする体制を用いた。²⁾

琉球使節は進貢使節制度の外交儀礼に似ている面は確かにあったが、たとえ幕府が中国の進貢・冊封関係の思想をモデルとして取り込んでいたとしても、北京での謁見儀礼と江戸の御目見得儀礼を比較すると、儀礼自体はかなり異なっていることがわかる。一般的に徳川公方を華夷秩序の中心としていたと言われているが、イデオロギーやレトリックは別にして、当時の儀礼において実際に果たした役割を見たら、大きな違いが見えてくる。

例えば、北京への琉球使者は明・清朝の役人や、朝鮮、安南からの使者などと共に一同儀礼に参加し、皇帝が見下ろす「天下」に取り込まれた。また、異国の代表者であっても、朝廷の役人のように九品のなかの位や位置の中に置かれた。対して江戸では、琉球使者は大勢の大名や幕臣と共に拝謁しなくて、彼らとは別の異国使節に対する御目見得儀礼に参加した。儀礼が行われる場所も北京の場合とは異なっており、屋外の広場ではなくて、

屋内の座敷であった。献上物についても大きな違いがあった。同じく「貢物」と称されても、琉球から明・清へ献上した貢物のように硫黄・白錫・紅銅ではなく、幕府へは武士が献上していたのと同様に、太刀・馬（または馬代銀）・織物・酒などを献上していた。こうした点から、幕府は明・清朝の華夷秩序概念をイデオロギーやレトリック、世界観レベルで取り入れたと言っても、儀礼のカタチや作法を真似したというわけではなかったことが判明する。むしろ、琉球を幕藩体制の中に取り入れることによって成立した儀礼は、中世から続いてきた日本の武家文化に基づいていたと言えるのである。

追加：琉球使節の京都滞在との謎

琉球使節が江戸への往復途中で京都に滞在したかどうか、という謎について補足する。

琉球使者は1620-30年代に数回、後水尾天皇や明正天皇、あるいは将軍徳川家光へ拝謁するために京都へ来たことがあった。³⁾ それ以降、京都御所や二条城への使節はなく、1644年からは使節は皆江戸へ向かった。しかし、その旅程の途中で、京都へ立ち寄ったかどうかは明らかでない。

京都へ寄ったことがあったと示す資料はいくつか存在する。1710年の「琉球国来聘記事」の冒頭に「京都旅館紫野大徳寺」との記載はあるが、この史料の中にはそれ以上の京都についての記載はない。⁴⁾ 次の1714年の使節随員であった程順則は公家の近衛家熙と接触した記録があり、贈り物の交換や近衛家所蔵品の模写も残されている。この時の贈品や写本は、現在でも近衛家の陽明文庫に所蔵されている。ただ、順則は草津や伏見で近

衛家使者と接触し、贈答品を交換したようである。⁵⁾ この時に使節が京都へ入った記録については、管見の限りで未だ確認できていない。歴史学者のロバート・サカイは琉球人が祇園祭を見たことがあったと記しているが、何に基づいた資料であったのかについては記載がない。⁶⁾

一方、1832年の琉球使節随員が記した「儀衛生日記」という旅日記では、大阪から淀川をのぼって伏見まで行き、京都へは入らずに伏見から大津、大津から草津という旅程が記されている。⁷⁾ 残念なことに、これほど詳細な記録はこの一例しかなく、他の使節（他の年）の場合については確認するのが困難である。

幕府に隠れてひそかに朝廷や公家と馴れ合うことがないように、幕府は大名や身分の高い武士がむやみに京都へ入ることを禁止していた。⁸⁾ したがって、琉球使節を薩摩藩下の家臣に準ずる者として、あるいは薩摩藩主や家老によって連れられた者として考えた場合、琉球使節が京都へ入ることはなかったであろうと推測できる。対して、朝鮮通信使の場合は、通例として京都で宿泊する記録が残されている。⁹⁾

つまり琉球使節が京都へ入ったかどうか、宿泊したかどうかについて確認できる史料や文献はほとんど残されていないのである。仮に琉球使節が京都へ入ったことがあれば、詳細を記載する史料や先行研究があるはずであろうが、現在のところそうしたものは確認できていない。逆に、琉球人が京都へ入ったことがないのであれば、それを指摘する文献もあるはずであろうが、そのような文献も確認できない。今後の課題として、この謎を解決するための調査を行い、史料を探す必要があるであろう。

[注]

- 1) 紙屋敦之、『幕藩制国家の琉球支配』(校倉書房、1990年)、p. 11.
- 2) Arano Yasunori, "The Formation of a Japanocentric World Order," *International Journal of Asian Studies* 2:2 (2005), pp. 185-216.; Marco Tinello, "The termination of the Ryukyuan embassies to Edo," PhD dissertation, Università Ca'Foscari Venezia (2014), pp. 6-7ff.; Ronald Toby, "Contesting the Centre," *The International History Review* 7:3 (1985), pp. 347-363.
- 3) 木土博成、「琉球使節の成立：幕・薩・琉関係史の視座から」、『史林』第99巻4号(2016年4月)、pp. 525-557.; 木土、「後水尾上皇・明正天皇の前で奏楽した琉球人」、『沖縄文化研究』第44号(2017年)、pp. 159-179.

- 4) 『琉球国来聘記事』。1710年。写本。沖縄県立公文書館所蔵。資料番号:T00015253B。p. 1.
- 5) 『沖縄復帰50年記念 特別展 琉球』(東京国立博物館、2022年)、pp.226-227, 230.
- 6) Robert Sakai, "The Ryūkyū (Liu-Ch'iu) Islands as a Fief of Satsuma," in *The Chinese World Order*, John King Fairbank, ed. (Harvard University Press, 1968), p. 126.
- 7) 儀間親雲上蔡修、沢岬親方毛惟新、『儀衛生日記』(写本、1832年)。翻刻：池宮正治、編、「資料紹介・儀衛生日記」、『日本東洋文化論集』第1号(1995年)、p. 150.
- 8) Constantine Vaporis, *Tour of Duty* (University of Hawai'i Press, 2008), p. 51.
- 9) Jeong-Mi Lee, "Cultural Expressions of Tokugawa Japan and Chosŏn Korea," PhD dissertation (University of Toronto, 2008), pp. 154-155, 228.; ロナルド・トビー、『鎖国』という外交』(小学館、2008年)、pp. 63-67.